

「郡山市歴史情報博物館」の 開館を祝う

―期待される「知の結節点」として―

柳沼亮寿

(九十期)

本年3月15日、多くの郡山市民、関係者が待ち望んでいた郡山市歴史情報博物館が麓山の地に開館した(写真1)。郡山を離れて久しい私も、兄が設立準備に関わっていたこともあり開館を心待ちにしていたのだが、去る4月の末に漸く見学することができた。前身の郡山市歴史資料館は、1982(昭和57)年に郡山市図書館付属歴史資料館として開館したが、私は訪れた記憶がない。この歴史資料館の継承・発展したものが歴史情報博物館である。郡山駅から徒歩20分ほどのところにある麓山公園を散策しながら通り抜けると文化通りに出る。周辺は公会堂、中央公民館、中央図書館などがゆったりと立つ落ち着いた一帯だ。

さっそく文化通り側の正面入口から入ってみると、広々としたホールとなっていて講演会やイベントに利用できるスペースがある。奥の受付カウンターに近づくと傍には壁一面の高精密

画像の大型モニターに「地形で見る郡山の日本遺産」が映しだされていた。360度方向から市全体を眺められ、「文化財」、「災害史」のテーマでも3D地形で見ることができる。受付でさっそくパンフレットをもらうと、まずロゴマークが目にとまった。麓山公園にある「麓山の飛瀑(ひばく)」をモチーフにしたものだという。飛瀑(滝)は、1882(明治15)年、郡山の発展の礎を築いた安積疎水の完成を記念して造ら



写真1 郡山市歴史情報博物館の全景

れたものだが、ロゴマークのシンプルなデザインがすっかり気に入った。そして以下の言葉が我々を誘うのである。
「郡山のはじまりを知り、また、ここからはじまる。」

「過去と未来をつなぎ 郷土への誇りを育む
「知の結節点」

博物館の名称は、郡山市の歴史的特質である「交流」、「多様性」、「境界性」を踏まえ、新たに「公文書館」の機能を加えた博物館として、豊かな地域史像を発信する拠点という理念がもたれている。「公文書館」とは、役所の公文書等を歴史資料として保存・活用する機関であり、県下市町村でこの機能をもつ博物館は初めてだという。私は高校卒業以来、地元を離れているため、正直言って郡山に関する知識はかなり断片的なものである。遠く奈良時代には安積郡の役所がおかれ、江戸の世には宿場町であったこと、そして明治になってからは安積疎水が建設されたことがまず頭にうかぶのだが、その程度なのだ。

さっそく「常設展示室」の入口を入ると小さなスペースにガイダンスシアターがある。「郡山ディスカバリー」と題し、郡山の地形や地域間交流の歴史が3DマップやCGを組み合わせてながら紹介される。各地の町やムラの様子、芸

能、歴史遺産の映像が流れ、地理的歴史的に様々な文化の行き交うところであったという背景から、常設展見学の導入となっていて興味がそえられる。

大きなホールに移動すると、やや照明を落とした空間のなかにテーマ展示「ものと文化―海山を越えて―」として、展示物が入った6つのガラスケースが立っている。縄文土器、小さな壺、浄瓶（じょうへい）、絵馬、浄瑠璃の人形、そして測量機など、一見なんの脈絡もない文化財である。しかし、ひとつひとつ説明を読んでも

みると、各時代を代表する文化財を配置したものののだ。朝鮮半島から渡来した技術や京の文化に由来するものなど、展示物の形態や技術的背景から、交流によってもたらされた歴史を感じることができる。とりわけ、「二彩浄瓶」と

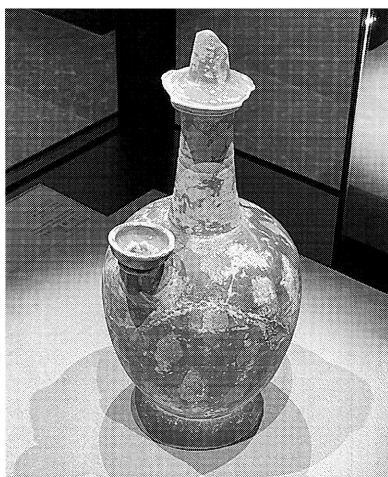


写真2 二彩浄瓶

呼ばれる水入れは（写真2）、形はインドから、複数色の上薬はメソポタミアに起源をもつという。また、日和田高倉で明治期まで上演されていた人形浄瑠璃の人形は70〜80cmもの高さがあり威厳さえ感じる（写真3）。そして人形浄瑠璃の北限が郡山であることもはじめて知ったのだ。同じホールには、「道とまち―交通の要衝―」と題したプロジェクトンマップングがあり、主要な川沿いに人が住みつき、道の整備によって人・モノ・情報がもたらされた歴史が分かりやすく説明される。そして、この大ホールを囲むように、原始、古代、中世、近世、現代の5つの展示室がある。

「原始」コーナーは、「旧石器時代」列島に住み始めた人びと、「縄文時代」移動生活から定住へ、「弥生時代」水田稲作のはじまり」



写真3 人形浄瑠璃の人形

に分かれている。特に弥生時代初期の御代田B遺跡から出土した土器は、縄文時代の文様を残す一方、弥生時代の新たな形や文様の特徴があることによって、東北部における弥生時代はじめの基準資料となっているという。どこか誇らしい気持ちになった。また、貯蔵用に作られた直径200cm、高さ180cmほどの穴については（「フラスコ状土坑」）、その断面をはぎ取った資料が壁一面に展示されており、デジタルによらない展示物の良さを感じた。なお、縄文時代後〜晩期の「猫頭形土製品」（写真4）は本場に猫の後頭に見えてかわいらしく、新博物館のマスコミキャラクターとして「じよもにゃん」と呼んでいるというが、購入できないのが残念であった。



写真4 猫頭形土製品



写真5 板碑

「古代」コーナーは、古墳時代、奈良・平安時代である。「古墳時代―中央と地方の萌芽―」では、特に私の実家のある方面の山中日照田遺跡が印象に残った。大安場古墳の主が住んだと考えられる古墳時代前期集落遺跡で、竪穴住居の数は郡山市域最大の規模であるという。「奈良・平安時代―国家制度の成立―」では、各地に国・郡・里（郷）がおかれ、平安京と陸奥国府の多賀城を結ぶ「東山道」が整備され、往來のために役所間に駅家（うまや）が設置された。このコーナーには、古代安積郡の瓦窯と瓦、文字資料としての木簡などが並んでいる。かの紀貫之が和歌を学ぶ際の基本と語った安積山の歌と難波津の歌が書かれた復元木簡が2本展示されていた。一方、清水台遺跡は、陸奥国安積郡の役所である郡衙がおかれたところだ。7世紀

後半から8世紀はじめにはじまり、9世紀前半に出土遺物や建物の数がピークを迎え、10世紀中頃に土器が捨てられた穴を最後に、建物などの痕跡が見られないという。このことからその繁栄と衰退が理解できるのだ。

「中世」コーナーでは、背丈もあるほどの「板碑」（写真5）と呼ばれる石の供養塔が入口に立ち、我々を招き入れる。鎌倉時代に入ると、幕府から安積郡に伊東氏が派遣され、その惣領家（本家）が安積氏を名乗ったという。また、この時代の様子は、「ビックパレットふくしま」とその周辺の発掘調査によるところが大きい。南北に走る「奥大道」に沿った鎌倉地時代の「南の町」、また室町・戦国時代の「北の町」が確認されたのである。戦国時代には、伊達、蘆名、田村、二階堂、佐竹の各氏が割拠し、伊達氏が各氏を滅ぼすに至る過程で起こった御代田合戦、摺上原合戦、郡山合戦などはよく知らなかった。このような動乱の時代のなか、商人たちは、物資の調達・輸送だけでなく、情報の伝達という重要な役割を担っていたことが説明される。

「近世」コーナーでは、まず年表と郡山宿周辺図（文政年間）がある。「領主と領地」では、水戸支藩として守山藩（松平家）、庶民の生活、村と領民、庶民の暮らしと続く。郡山が生んだ

幕末の朱子学者・安積良斎（1791―1860）が、昌平黌教授の前に二本松藩校教授を歴任していたことを知る。「街道と宿場」では、安積七宿のうち郡山宿は江戸時代に開かれ、本陣、脇本陣などがおかれ、1824（文政7）年に郡山村から郡山町に昇格したのだという。「災害」は小さなコーナーだが、改めて郡山周辺の災害史を理解する必要があることを認識させられる。最後にタッチパネル「奥州諸街道絵図」では、幾つかの街道ルートを見ることができ、そのなかで、「自三春城下至小田川駅」を選択すると、実家に近い赤沼の地名や橋、子供の頃遊んだ裏山の在所名が出てきて感激し、何とも郡山の歴史がぐっと身近なものに感じたのであった。

「近現代」コーナーでは、入口正面に年表「近現代の主なできごと」とともに安積開拓事業を進めた開成社が紹介されている。開成社は、1873（明治6）年、福島県典事・中條政恒が大槻原の開墾を目的に郡山の商人に協力を呼びかけ、阿部茂兵衛を代表とする25名により結成された団体であり、新政府、福島県とともに安積開拓事業を進めたのだ。その25名が写った写真などが展示されていた。このコーナーは、「1 明治維新と新制度」から記憶に新しい「12 東日本大震災と近年の災害」、そして現在

の「13 今日の郡山市・SDGs 未来都市こおりやま」に至るまでを対象としている。

以上の「常設展示室」とは別に「企画展示室」がある。第1回企画展は「過去と未来をつなぐ、新たな博物館の挑戦」(3月15日〜6月15日)と題して、前身の歴史資料館の歩みを振り返る展示、解説がなされていた。施設の老朽化や相次ぐ震災による保管・保存環境の悪化が課題となって検討がなされてきたことが理解できるだろう。

このほか、駐車場側入口から入ってすぐのところに「交通と交流のギャラリー」という部屋がある。そこには、明治から大正にかけて郡山と三春を結んだ「三春馬車鉄道」の実寸大の復元品が展示されている(写真6)。実際に乗ってみると車掌のアナウンスがあつて乗車感覚を味わうことができ、タイムスリップしたかのようであつた。そしてこの馬車鉄道が既にあつたことが後の磐越東線の敷設に繋がったという歴史がある。郡山の鉄道交通史の生き字引であり、新博物館に展示されるにふさわしいものである。欲を言えば、すぐに目につく場所に展示してほしかった。

以上、常設展示室を中心に概観してきたが、知らないことが多かったため当然なのだが、発見の連続であり、実に楽しいものであつた。ま

た、現代のデジタル技術を最大限に活用した解説は、展示物に対する我々の理解をいっそう深めるものとなっている。そして、数少ない断片的な知識が線となつてつながり、古代から現代に至る郡山を取り巻く歴史の流れを全体として理解できたのであつた。郡山は単に人・モノ・情報の「交流」の通過地点ではなく、東北南部、関東の北、北陸の東という「境界性」のなかに多様な文化を育んできたのである。現在、既に次期企画展「明治天皇の巡幸と安積開拓」(7月5日〜8月31日)が開催中であり、この『桑野会報』が発行される頃には次の企画展が始まっていることだろう。是非とも十分な時間をとって見学することをお勧めしたい。実をいうと、



写真6 三春馬車鉄道の車両

4月には兄の案内でざっと見学しただけであつたため、5月に改めてひとりで訪れたのだが、優に4時間を要したのであつた。

郡山は、城下町でも有名な史跡があるわけでもなく、けつして観光地とは言えない。従つて新博物館はいわゆる「文化観光」の役割、機能を果たすことは難しいであらう。しかし、一般市民の「もつと知りたい」、「深く学びたい」を満足させるための社会教育とともに、中学校や高等学校の学校教育においても活用できる内容が豊富に含まれている。また、私のように地元を離れた「郡山人」としては、自分の出身の土地とそれに根差した在来知を通して、アイデンティティを確認、再認識することができる良い機会であり、是非とも訪れてほしい魅力ある空間だ。そして新博物館には、郡山の歴史に触れ、未来へのヒントを探る、まさに過去と未来をつなぐ「知の結節点」としての役割を期待したい。歴史情報博物館の開館は、前身の歴史資料館や文化財を担当する市の部局、そして民間の研究者や研究団体などの長い研究や活動のひとつの到達点であるともいえるだろう。これまでの活動に携わってきた方々を含め、新博物館設立にあつた関係者に敬意を表するとともに、郡山市政100年という節目に開館されたことをひとりの「郡山人」として喜びたいと思う。